
死の死。

猫田セバスチャン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死の死。

【Nコード】

N2378H

【作者名】

猫田セバスチャン

【あらすじ】

閉じ込められた少年。その先に何を見る？

無機質な空間。一体ここに何日間、閉じ込められているのだろう。

白い壁に、白い天井。一人用のベッドに机と椅子。そして僅かばかりの本が並べてある本棚。使えるものはそれだけで後は何も無い。排泄用の仮説のトイレが部屋の隅にあり、ペット用の砂のタイプだ。7日くらいに一度、取り替えるだけなので部屋の中は酷い匂いが立ち込めている。

記憶が曖昧で、常にまどろっこしい感覚。きっと、定期的に部屋に入ってくるアイツが、僕に妙な注射を打ってくる。あれが、恐らく覚せい剤か何かの類。

僕の脳細胞を破壊しているのではないか。一日に僅かばかりの固形食品と、変な味のするこれも僅かな水が与えられるだけ。まともでいられる訳がない。

小学校に通っていた頃までの記憶はあるのだけれど、今僕はいくつで、ママとパパはどういう人だったか、思いだせない。

ここから、脱出する方法は一つ。アイツが入ってきた時に、アイツを殺すことだ。何百回と想像し、何十回と試したがうまく行かない。僕はまだ幼く、アイツは大人で強い。朝一度っきりのチャンス逃すと以後一日、何も無い。

音のない世界が続く。何百回と読み返した本、を手に取り、ぱらぱらとめくり壁に叩き付ける。いらいらする。最近はいつもこうだ。何時間かぼうつとして、それから腕立てふせを試してみる。腹筋、背筋、スクワット。何セットも繰り返す。倒れるまで。繰り返す。こんな所で死にたくない。死ぬのが怖い。恐怖を怒りに変えて、鍛錬を続ける。武器になるものが何一つないんだ。だから体を鍛える。小学生の頃は少しぼつちやりとしていた筈だけれど、今は余分な脂肪がいつさいない体だ。鏡がないから分からないけれど、きっと僕

はするどい顔付きをしているに違いない。そんなことを考えている間に一日が終わり、また、全く同じ日が始まる。

アイツは部屋に入って何も云わずに淡々と事務的に動く。アイツはいつも、マスクのようなもので顔を覆っており、素顔は分からない。

抵抗しようとする、強く押さえつけられて、注射を何本も打たれる。それで、眠くなってしまい、抵抗は出来ない。まだ足りない。もっと力が欲しい。もっと食べ物が欲しい。新鮮な空気が吸いたい。ママやパパに会いたい。思いは虚しく、この生活は何日も続いている。ママやパパは、探してくれているのだろうか。警察は、何を探しているんだ。もう、とつくに死んだとみなされているのではないか。

悔しい。僕は体を鍛えることで、平静を保とうとする。来る日も来る日も、孤独に狂いそうになりながらも鍛錬を続けながら、さらに何日も過ぎていく。

朝、アイツがやってくる。もう、毎日のように抵抗してやる。その度に注射を打たれる。ダメだ体がどんどん弱っていく。けれども続けよう。明日も明後日も明々後日も。アイツに勝つまでだ。

ある日、部屋の隅でアイツが入ってくるのを睨む。アイツは僕を掴み、部屋の真ん中まで引き摺ろうとするから、激しく抵抗する。無茶苦茶に暴れてやる。

すると、ぐらぐらと本棚が倒れてくる。アイツは僕を強く押し、僕は隅の壁に叩きつけられる。ドスンと大きな音がして、本棚が倒れてしまっている。

僕は壁に頭を打ち付けてしまい、痛みに悶絶してしまう。しばらくして、落ち着きを戻し、部屋の中を見渡してみる。すると、アイツは本棚の下でうつ伏せになって倒れている。

僕は必死に起き上がり、よろめきながら、初めて部屋の外に出る。薄暗く、長い廊下になっている。ふらふらと壁を伝って歩いていく。すると、となりの部屋だろうか、扉があり、中に入ってみる。

ここは手術室？妙な、物が一杯置いてあるけれど、どれも散らかって
いて、
誇りっぽい。部屋の隅にハンガーを掛ける、金属性のスタンドが置
いてあり、
それを掴む。少し重くって、引き摺りながら自分がいた部屋に戻っ
てみる。

アイツは、本棚をから這い出ている、部屋の中央まで、這ってい
る。

服に血が付いている。僕はなんの躊躇いもなく、持っているスタン
ドを持ち上げ、そして、力強く振り下ろす。鈍い音とともに、何か
が潰れる感触を感じる。スタンドを投げ捨て、その場にへたり込む
とうとうやった。アイツは完全に沈黙している。息がしていない
か確認してみる。大丈夫だ。僕はやったんだ。起き上がり、一度見
下ろす。

「クソ野郎」頭を蹴つ飛ばす。

僕は、部屋を出ていき、さっきの部屋も通り越し、廊下を進む。
突当たりまで来ると、そこにはまた扉があり、開けてみる。

自分がいた部屋と同じような部屋だけれど、何やら、コンピュー
ターだの、本だの、

乱雑に散らかっている。部屋の片隅に、いつも僕が与えられていた
固形食品が

ダンボールに入っているのを見つける。僕は飛びつき、乱暴に袋を
開けて食べる。

横にペットボトルの水を見つけて、喉に詰まった物を胃に流し込
む。

お腹が一杯になるということは生まれて初めてな気がした。

満足して、その場にへたり込む。しばらく、興奮しているのが落
ち着くまで、
その体勢でいる。

やがて、体を起こし部屋の外に出る。そして、出口を探そうと、

反対側まで歩いてみる。途中、自分がいた部屋まで戻ってみて、アイツがちゃんというか確認してみる。アイツはまだそこにいる。

僕は、さつきとは反対側廊下へと向かう。すると、大きな鉄の扉を見つける。

扉は、ずっしりと重そうに黒く、佇んでいる。

僕は扉を押してみるが、開かない。引いてみても開かない。

力いっぱい色々試すが開かない。鍵だ、鍵がいる。

僕は鍵を探そうとあっちこっちと彷徨う。見つからない。

全ての部屋を汲まなく探すも、ない。アイツの身につけているものの中にもない。

何故だ。

冷静になるまで考えて、ふと黒く開かない扉の前まで行ってみる。自分の目線より上の方、よく見ると、いくつかのボタンが付いているのを見つめる。0と1から9までの数字を並べてあり、横に画面がある。

手を伸ばしていくつかボタンを押してみる。画面には、アナログで押した数字が並ぶ。

暗証番号。それが合っていないと表示してある。

適当に何度試してみてもダメだ。

一度、食料があった部屋まで戻ってみる。どっかにメモ書きがあるかもしれない。

僕は机の上や棚の上を探す。本や書類には難しい、理解出来ないような、

計算式だとか、グラフだらけ。それらしいものは見当たらないのだけれど、

数字の羅列を見つけては試しに扉のボタンを押してみた。開かない。次の日、その作業を延々と繰り返す。お腹が減ったら、ダンボールの

固形食品をお腹一杯に食べる。よく見ると、ダンボールは、この一箱だけで、

ボトルの水も、あと、数本だけだ。ここを出なければならぬ。

今日も数字の羅列を探す。その次の日も、そのまた次の日も。見つからない。怒りに狂い、辺り構わず暴れだす。そこら辺の物を投げ、

ガラス張りの棚の扉が音を立てて崩れる。構わず僕は暴れる。

アイツがいる部屋からスタンドを持って来て、破壊を続ける。

コンピューターに対して、振りかぶった時、はっと手を止める。

ありったけのボタンを弄ってみる。すると、画面がパツと点いた。僕は喉をゴクリと鳴らし、つばを飲み込む。

コンピューターはいくつかの文字の羅列を映し出し、そして、トップ画面へと移った。

読めそうな文字を必死に探す。適当にボタンを押し続ける。

幾つかの項目の中に、『記録』という項目を見つける。なんとか、開けないか試す。

すると、開かれる文字の羅列。今は2027年!?日記のように文章が綴られていて、アイツが打ったものだと気付く。

少年はゆっくりだが、その全てに目を通していく。

そして、少年は全てを理解する。暗証番号も途中で見つけ、それを控える。

少年は全てを読み終え、黒い扉へと向かい、数字を押す。

そして、扉を開ける。

そこは、荒廃とした世界。砂漠の中、ビルが崩れ、車がひっくり返り、

瓦礫以外のちゃんとした建物などはない。自分が居た建物を振り返り見る。

「シエルター!?」これが、そうか。全ては滅んだんだ。僕以外。そして、僕もここにいるということ。放射能に体を蝕まれるらしい。

アイツの体を蝕んだように。そう、アイツは限界だったんだ。アイツは軍人らしい。

僕と唯一の生き残りだったという。

僕は荒廃として大地を歩いて見て廻る。

そして、そのまま砂漠の世界に消えていった。

世界は滅び、軍人は希望を未来に残そうとした。

それが、少年だ。

自分の髪が全て抜け落ち、血反吐を毎晩吐くようになり、先が長くないことを知る。自分が何に蝕まれているかは分からない。極力少年との接触は避ける。蝕んでいく可能性は無限にあり、どれがどれだか。

ただ、少年には一時、大流行してしまった極めて特殊なウィルスの抗体を持つ、ワクチンを打ち続ける。それが、効果があるかどうかは分からない。

少年は耐えられるだろうか、この世に自分しかいないという事実を。

軍人はもう、とっくに耐えられなくなっていた。

何回か、自殺を試したが死ぬ勇氣すら持てなかった。

軍人の生きがいは、気休め程度のそのワクチンを大量に作るということだけだった。来る日も来る日も。

もうすぐ、食料と水がなくなる。死が近づいている。

それでも、最後まで少年への投与は続けよう。ここまで、来たのだから。

コンピューターの中の『記録』の中には、軍人の後悔が綴られて

いた。

軍人の希望の、少年はもういない。少年はそれでも、外界に希望を
探し、
彷徨い続けたのだから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2378h/>

死の死。

2011年1月16日02時22分発行